

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

柿本朝臣人麿の近江国より上り来し時に、宇治河の辺に至りて作れる歌

(巻第三 二六四番歌)

もののふの八十氏河の網代木に
いさよふ波の行く方知らずも

新年会の会場に着いたとき、あることに気づいた。財布がない。家を出るときに慌てて鞆を新しいものに替えたせいだ。今更帰れない。その会では自分が一番年長なのにもかかわらず、カードすら忘れた。真つ赤な顔で後輩に打ち明けた。どつと笑われ、ほつとする人だと言われ、確信犯ですわねとつこまれ、さながら母に連れられて夜のレストランに来た小学生のようになっていた。

転職したとき、部を異動したときに思うことがある。「前のところなら、こうだったのに。」「今まで、これが当たり前だったのに。」続く言葉はおそらく、「ここは、前とは違ってやりにくい。」「また、一からの出発だ。」新入社員のころとは違う戸惑いを感じる。前のところでは、ビジョンをもって、中心になり動かしてきたことがあった。自分の仕事のスタイルもでき、人脈もあり、コミュニケーションも取れていた。そこで成し遂げてきた仕事、頼られていた自分。それがある日を境に急変する。四十にして惑わずという言葉があるが、現実には時代の流れや環境の変化に戸惑ってばかりだ。子どもの頃、四十歳と言えば、何でも知っていて、分別のある大人に思えた。五十歳と言えば、もう人生に卓越した華の盛りという感じがした。それなのに、四十を越えてもなんだか子どもの頃と変わらない。流れる先を見つけようと日々々がいている。言い訳を並べて、自分は正しいという瀬に立とうとする。

前の良さを口にしたたり懐かしさにひたつたりもする。が、すつきりしない何かをもまた感じている。分かっているのだ。もうあの場所には戻れない、前に進むしかないことを。

もののふの多くの人々、その氏——宇治川の網代木にただよい続ける波のように、行く末など分らないものだ。滅び去った近江の都に仕えていた人々はいったいどうなったのであろうかと無常の思いを詠んでいる。網代は秋から冬にかけて魚を捕る仕掛けのことである。杭に竹などで編んだ簀を張り、氷魚(鮎の稚魚)をとるものである。波はその杭に当たり、行き場を探してとどこおる。やがてためらいながら吸い込まれ、流されていく。時代に、立場に、人に、流れに翻弄される。この歌は、人麿が近江荒都より奈良に帰る途中に、宇治川で宇治旧都らの過去が重なり詠まれたとされている。ただ水が流れているだけなのに、そこに自分を見る。川は何かを教え、川は何かを語りかける。写真の歌碑は、宇治市を流れる宇治川の橋島にある。宇治の平等院参道を抜け、橘橋を通って中の島に渡る。まさに川に囲まれた地の碑であり、歌の世界に入り込んだようだった。

知り合いの心理カウンセラーに言われたことがある。「年とか経験とか肩書きとかで計ろうとするけど、人ってそんなに変わらないよ。二十代も五十代も、みんな子どもじゃないか。」人はみな、大人の顔をもつ子どもかもしれないと思うと、少し楽になる。子どもの自分は情けなくもあり、可愛くもある。そして、いざというときの自分を支えるのは、怖いもの知らずに突き進む「子どもの自分」なのかもしれない。

